

留学報告書

留学を終えて

<初めに>

2014年8月27日から12月23日まで、私はロシア連邦沿海州の都市ウラジオストクに留学に行ってきた。帰国した今でも友人たちに「どうして行ってきたの?」とよく聞かれる。留学を志望した理由は幾つかあった。元々、私は日本に隣接しているのに関わらず関係が希薄で「よくわからない国」という印象をロシアに対して抱いていた。その疑問からロシア関連の本を読み初めヨーロッパとアジアの両方の文化の雰囲気を感じ出しているこの奇妙な国に興味を持ち始めた。特に旧ソビエト連邦の時の歴史に一番の関心を持った。そうしたなかで次第にロシア語にも興味が湧いて、一年生後期の言語選択でロシア語コースを選んだ。そして当校の派遣留学に参加をしようと決意した。新潟に隣接しているウラジオストク市への留学と聞いて私は直にロシア語を聞いて、ロシア文化に触れてみたいと強く望んだ。

今回の留学は例年とは少々異なった。提携先の大学が変更したのである。私を含めた日本人留学生18名は2013年度まで提携してきた極東連邦大学(ДВФУ)ではなく同市にあるウラジオストク国立経済サービス大学(ВГУЭС)が留学先となった。去年の留学報告書に綴られていた極東連邦大学と国立経済サービス大学は何が違うのか、どのような設備があるのだろうか、留学前から思いを巡らしていた。向こうでの授業についていけるだろうか。日常会話が身に着けられるだろうか。出発する前から心に幾何かの不安を募らせていた。しかし、実際現地の生活していく中の日々の授業や生活で僅かであるが単語や文法が次第に理解できるようになってきた。私にとって四か月間の異国での生活は自身のこれまでの価値観を大きく変えた出来事であった。辛いと思える出来事もあった。しかしそんなことも忘れるぐらい楽しいことが沢山あった。そして、何より17名の留学生の仲間たちと以前より仲良く打ち解けられることが出来た。このような素晴らしい体験を味わうことが出来たのは、ひとえに大学の先生方や両親のお蔭である。この四か月間で何を見て、何を学んだのかを述べていきたい。



ウラジオストク市中央広場にて。ロシア革命の勝利記念銅像

・ <授業>

授業が始まって一週間半の間は我々日本人留学生だけで行われた。我々は授業中に Юра(ユーラ) Максим(マキシム) Паша (パーシャ) 等のロシア名の愛称系で呼ばれる。これは教員達が我々を覚えやすくするための措置である。大学での授業内容は大きく分けて文法、日常会話、リーディング、地理、歴史、芸術、音楽の七科目であった。その後各自、自分のレベルに見合った三つのクラスに分けられて中国人、韓国人、インドネシア人、フィリピン人等の他国からの留学生と交じって授業を受けた。しかし文法、リーディング、日常会話以外の授業は日本人留学生のみの同じ教室で授業を行った。授業を行う先生たちはロシア語のみで授業を進める。当初は何を言っているのか分からなくて不安になった。だが、基本的に先生は分かりやすいロシア語で丁寧に説明をしてくれる。そして、先生によっては英語やジェスチャーを用いての説明をしてくれる人もいる。そうして次第に先生が何を言っているのか自然に分かってくるようになった。

日々のロシア語の授業で最も役に立ったものは電子辞書である。勿論、紙辞書も役に立ったが紙辞書だと単語を探すのに時間が、かかってしまい気が付くと授業が先に進んで置いて行かれることが多々ある。ロシア語辞書が搭載されている電子辞書の値段は高値であるが留学先での授業、特に歴史や地理等の専門用語が豊富な授業においてはとても役立つので留学の際に可能ならば持っていくに越したことはない。

授業は月曜日から金曜日まで行い、土曜日と日曜日は休みである。クラスごとに異なるが一日平均三限、一コマ 90 分で一限目は朝 8 時 30 分から始まり、二時半頃に授業が終わる。

・ <寮での生活>

寮は大学と隣接していて屋内間での行き来が可能であった。我々が暮らしていた寮は第

二棟に位置し、全館は暖房が効いていて真冬に直面した 12 月でも半袖で過ごせるほど暖かい状態が維持されていた。しかし時々、温度が下がり風邪気味に成りかけたこともあった。

寮内では WI-FI が使用可能なのでパソコンやスマホからでも日本と変わらずインターネットや LINE が使用できた。しかし、我々が寮に来た当時はまだ WI-FI 設備が整っていなかった。故に大学本棟にある無料 WI-FI を度々利用していた。9 月の下旬に WI-FI の接続する設備が整って大学側と使用契約を交わした。一か月の使用料は 40GB で 800 ルーヴルの値段であった。



第二寮棟



机と洋服ダンスが一体化したベッドが二つある部屋

私が住んでいた部屋には机とベッドが二つあり冷蔵庫やテレビも置いてあった。そしてトイレ、シャワー、洗面台も同じ部屋にある。部屋の中も暖房が効いていて極めて快適な状態で過ごせる。しかし、食品はすぐ腐りやすい環境なので冷蔵庫に入れておかなければならなかった。加えて、部屋にはゴキブリが発生することが多々ある。現地で購入した殺虫剤を一日一回、冷蔵庫と棚の隙間やベッドの下に小まめに散布した。私たちが寮に来た当初、シャワーは冷水しか出なかった。なので、温水が出るまでは大学に隣接しているスポーツジムのロッカールームのシャワーを使用していた。9月下旬頃ようやく部屋のシャワーに温水が出るようになった時はとても嬉しいかったものだ。

暮らしていた階の奥には共同の調理場があった。そこで我々はスーパーで買ってきた食材を用いて料理をした。当初、私は出鱈目に野菜や肉を入れた炒め物しか作れなかったが、次第にカレーやパスタ、ボルシチといったものまで作るようになり度々仲間たちと料理を合作したり食べあったりした。しかし基本的に調理場は夜しか使用しなかった。授業日の日は大抵、シリアルやパン等を食べて授業が終わったあとの午後の時間はカップラーメンや屋台で売られているピザ、ホットドッグ、プローフ（ネギ、ニンジン、牛すね肉を具としたピラフ）やピャンセ（肉汁をたっぷりも含んだ、ひき肉と刻みキャベツが入っている饅頭。元々は中国の食べ物）等を食べて過ごしていた。

調理場の更に奥にいくと洗濯機が設置してある。寮を管理している寮母さんに直接申告して約 50 ルーヴル位の使用料を払えば洗濯機を使わしてくれる。その他にもトイレの紙が不足や部屋の照明の調子が悪いなどといった問題は寮母さんに報告すれば大抵のことは解決してくれた。

・ <環境と気候>

9月のウラジオストクの気候は日本よりも快適で過ごしやすかった。約 20℃前後の気温なので左程、汗をかいたりはしなかった。加えて洗濯物が乾きやすく夜はとても寝やす

い環境が維持されていた。天候は基本的に快晴で雨はあまり降らなかった。しかし、10月中旬以降になると急激に肌寒くなる。現地では手袋やマフラー等の防寒具は店によっては安い値段で購入できるが、コートやセーターは高いうえに体のサイズに合うものが少なかった。日本から持参してきた冬服は早くも役に立った11月下旬頃になると雪が降り始めた。気温も時間帯によっては氷点下を上回ることがある。12月の初め頃に大雪が降りウラジオストク全域が交通渋滞を起し、大学の授業が休校になったことがあった。冬のロシアはとても寒いので防寒具対策を念頭に置くことを推奨する。

12月のウラジオストク市は一面銀世界であり、雪が積もった次の日が晴れていると太陽光で雪の白が反射してとても眩しかったものだ。冬の外の空気はとても澄んでいて痛みすら感じるほどの冷たさであった。海岸に行くと海は寒さで凍結して、凍った海の上を歩けることが出来た。景色を見れば、真っ白な氷の雪原が形成されていた。

日照時間も日本とは大きく異なっていた。夏は午後8時前後で日没が始まり、冬の朝は7時ごろでも真っ暗で、ちょうど寮を出ようとする8時20分ごろにようやく日の出を見ることが出来る状態になる。

ウラジオストク市の郊外から離れると多くの自然が見ることが出来る。特に極東連邦大学の本校があるルースキー島（Остров Русский）は自然が満ち溢れていた。ルースキー島の海岸からは2012年のAPECで開通したルースキー島連絡橋がウラジオストク市ごと一望することができる。ウラジオストク経済サービス大学前のバス停から極東連邦大学まで直通で行けるバスがある。およそ20分でルースキー島に着く。料金はどこまで乗っても一律18ルーブルという日本では考えられない料金システムであった。



ルースキー島の極東連邦大学敷地内

・＜イベント＞

我々の音楽の授業を指導してくれたスヴェトラナ・ヴラジーミロヴナ先生が引率をしてくれて様々な行事に参加した。その多くはロシアの音楽や舞踊に関するイベントであ

った。大学からおよそ 2 キロ離れた場所に高低差が激しいウラジオストク市の看板ともいえるケーブルカーがある。そのケーブルカーに乗り、下って行った場所にあるプーシキン広場にてロシアの伝統舞踊ハラヴォド（Хороводо）の体験をした。思いのほかに激しく動き回るダンスなので終わった時には汗をかいていたものだ。

その他にはウラジオストク港に停泊してある海洋国立大学が所有している帆船ナデジュダ号（Надежда）を見学したこともあった。屈強な体格をした水夫の引率の下であちこち船を見学し、ロープの縛り方などの指導を受けたりして交流を深めていった。



ウラジオストク海洋国立大学所有練習船ナデジュダ号にて

特に一番、思い出に残ったのは 12 月に行われた極東連邦大学でのイベントに参加し民族衣装を身に着けロシアの歌を合唱し、伝統楽器のローシキ（木製の二つのスプーンを打ち鳴らす打楽器）の楽器演奏を行った。多くの観衆の前で披露して本番の前はだいぶ緊張した。しかし、終わった後の高揚感は今でも忘れられない。後日 YOUTUBE を見たらその時のローシキを演奏している姿を映した動画がアップロードされていて少々驚いた。

・ <人との交流>

私のクラスにフィリピンから来たホセと他のクラスに所属しているインドネシア出身のフェルジというひょうきんな性格をした二人がいた。彼らは現地の教会で神父として勤めていた。ある時、日本人留学生と中国からの留学生 8 名が彼らの教会に招待を受けたことがあった。彼らの勤務宿舎の庭で卓球やバドミントン、サッカーをした。昼食時にはホセ自作のスープを私たちに振舞ってくれた。午後は教会の中を見学し全員で記念撮影をした。



教会にて

ある時、夕食時の調理場でアンドレイというロシア人と知り合ったことがあった。彼はとてもフレンドリーな性格をしていた。自分がロシア語で何を言っているかわからない時に彼は英語で分かりやすく説明してくれたりもした。日本のゲーム、音楽の談義で盛り上がりロシアのおすすめの曲を教えてもらったこともあった。最初は会話だけで緊張したが段々会う度に彼との会話が楽しいと感じてくるようになった。別れの際にした熱い握手と抱擁は生涯忘れることは無いだろう。



アンドレイとツーショット。調理場にて。

・ <最後に>

帰国してから大分時間が経った今、思うことは四か月間も見知らぬ異国の土地で自分が生活していたことについて驚いている。幸運なことに何一つ大きな事件に巻き込まれず無事に過ごせることが出来た。最初は日本と異なる環境に置かれ、買い物ですらもままならなかった。相手に伝えたい言葉があるのに上手く言葉を表すことが出来ず、もどかしい気持ちになったことも多々あった。ルールや習慣も日本と異なっていて当然だと頭で理解していても割り切れないこともあった。しかし、周りの仲間たちのお蔭か段々と周りの環境に適応できるようになった。

留学前にもロシア関連の書籍を読み漁っていたが現地と本の内容は必ずしも同じであるとは限らないということを感じた。やはり、間近で見ると本や映像だけの情報を見るのではまったく違うということに初めて理解した。最初は一見不愛想で怖いなと思っていたスーパーや屋台の店員も、きちんとした意思疎通すれば彼らも笑ったりもするし、ちゃんとした対応もしてくれる。今までロシアに対して抱いていたイメージがこの留学を通して変わった。それと同時に日本で当たり前だと思っていたことが当たり前ではなかったのだと理解した。恐らくこの留学に行かなかったら一生、気づくことは無かったと思う。

最後になりますが、この素晴らしい体験の機会を与えてくれた両親と大学の先生方、誠にありがとうございました。これからは留学で得てきた知識と経験を土台として更なるロシア語の研鑽をする所存でございます。そして出発前から帰国まで共にした17名の仲間たちへ。一緒に留学生生活を共にしてくれて本当にありがとう。

以上